

# 南海トラフ地震時の 16人の被災シナリオ

---

# 目 次

1. はじめに
2. シナリオの内容構成
3. 地震発生後の〈3ステージ〉のポイント
4. この後登場する「16人の物語（シナリオ）」を、なぜ読む必要があるのか？
5. 人物像・場面設定
6. シナリオ展開イメージ
7. シナリオ内容

# 1. はじめに

本資料は、行政向けの手順書ではなく、県民の皆さんを主な読者として想定し、「地震後の状況」を具体的に思い浮かべ、今の備えに結びつけるために作成しました。

この資料は、南海トラフ地震の発生後に「何が起こり、県民の皆さんは、何を体験することになるのか」を、沿岸部／内陸部（中山間）／高知市周辺（長期浸水）／観光客の4つの状況に分け、**16人のケース（シナリオ）**として具体的に描いたものです。

内陸部に自宅があっても、地震発生時は、沿岸部に来ているかもしれませんし、その逆の場合もあるため、すべてのシナリオは、もしもの時の皆さんの参考になるはずです。

各シナリオは、発災直後の「命を守る」から「命をつなぐ」、そして「生活を立ち上げる」までの時間の流れに沿って展開します。南海トラフ地震が発生した時のドラマを16話見るつもりで、ぜひシナリオを読んで、起きる状況を実感していただければ幸いです。

※「シナリオを読む価値」については、P 6に詳しく記載しています。



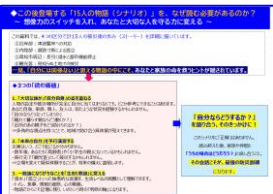
▲高知新港高台緑地

# 2. シナリオの内容構成

## 3. 地震発生後の<3ステージ>のポイント（命を守る～命をつなぐ～生活を立ち上げる）

地震発生後の時間経過の3ステージ「**命を守る**」「**命をつなぐ**」「**生活を立ち上げる**」について、各エリア区分で覚えていただきたい重要なポイントをまとめました。（人物像に関わらず知ってほしいことを記載しています。）

## 4. この後登場する「16人の物語（シナリオ）」を、なぜ読む必要があるのか？

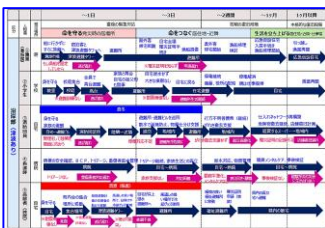


一見、「自分には関係ない」と思える物語の中にこそ、自分と家族の命を救うヒントが隠されていることを説明し、3つの<読む価値>を提示しています。

## 5. 人物像・場面設定

3地域+観光客=4区分を設定し、各区分3～5（計16）のシナリオについて、<人物像>や<場面設定>の概要を一覧にして示したものです。

## 6. シナリオ展開イメージ



計16のシナリオ（被災ストーリー）の展開イメージを、時系列で示したものです。**青矢印**に状況や行動を示し、**赤矢印**にもし対策をしていない場合の状況を示しています。

## 7. シナリオ内容

6. の計16のシナリオ展開イメージを、具体的に記載したものです。  
※下段に、対策（対応）をしなかった場合に想定される状況を記載しています。

# 3-1. 地震発生後の<3ステージ>のポイント

## ◆まず覚えてください！：地震発生直後の<居場所>と「命を守る」行動のイメージ

どこで被災するかはわからない（自宅ではないかもしれない）。それぞれの居場所の「命を守る」行動をイメージしておくことが重要。

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
	命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣		生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場	

居場所		命を守る（想定シナリオ）
沿岸部	津波あり	<p>①近くに津波避難タワーや津波避難ビルがある</p> <p><b>即座に垂直避難：</b>出来る限り早く、最寄りのタワーやビルへ駆け上がる。「逃げ遅れ」は死に直結するため、荷物は持たず、靴を履いたまま避難する。上層階へ移動： 想定される津波高より一段でも高い場所を目指す。冬場や夜間は防寒が命綱となるため、備え付けの備品（毛布等）を使用。</p> <p>②タワーやビルは無いが、近くに高台がある</p> <p><b>「最短距離」で高台へ：</b> 道路が亀裂で通れない可能性を考慮し、あらかじめ決めた避難路や、斜面を駆け上がる。</p> <p><b>二次災害への警戒：</b> 余震による土砂崩れに注意し、安全な高所で待機する。津波は何度も押し寄せるため、1日目は絶対に下に降りない。</p>
		<p><b>土砂災害からの回避：</b> 激しい揺れによる山崩れ・地滑りから身を守る。斜面から離れた頑丈な建物、または開けた平地へ移動する。</p> <p><b>近隣共助：</b> 道路が寸断され、救助は数日間来ないことを前提に行動。近隣で声を掛け合い、安否確認と救助活動を住民のみで行う。</p> <p><b>資源の温存：</b> 地域の公民館等に備蓄がある場合は、孤立長期化に備え、1日目から計画的に水・食料・燃料を管理する。</p>
周辺	高知市 地域 長期浸水	<p><b>「3階以上」への垂直避難：</b> 地盤沈下により水が数週間引かないため、1階、2階は水没するリスクが高い。自宅が低層なら、直ちに近隣の「津波避難ビル」の3階以上へ移動。市内勤務者も自社ビルが堅牢なら3階以上へ。市内商店は津波避難ビルに客や歩行者を誘導。</p> <p><b>孤立への覚悟：</b> 1日目のうちに、手元にある水や食料をできる限り上層階へ運び上げる。浸水が始まると移動は不可能。電力喪失、トイレの使用不能に対し、簡易トイレや非常用電源の準備を確認する。</p>
観光客	津波あり	<p><b>案内表示の確認：</b> 街中の電柱や路面にある「海拔表示」と「津波避難ビル」のマークを探し、即座に駆け込む。基本は「周囲の地元住民が逃げる方向」へ共に逃げる。</p> <p><b>外国人対応：</b> フェリーターミナル（高知港）では、目の前の高台へ「GO UP!」「RUN!」と叫びながら逃げる。ジェスチャーで高所を指し示す。高知市内では 観光施設（高知城やひろめ市場等）のスタッフの誘導に従う。青色の「TSUNAMI EVACUATION」サインに従い、高いビルに入る。</p> <p><b>お遍路さん（沿岸部の国道を歩く）：</b> 重い金剛杖やバックパックは命を奪う重荷になる。命を守るために最低限の貴重品以外は捨て、斜面を這い上がっても「高さ」を確保する。国道のキロポスト（距離標）等で現在地を確認し、可能であれば110番や119番ではなく、家族等に「高所に逃げた」ことだけを短く連絡する（回線混雑回避のため）。</p>

# 3-2. 地震発生後の<3ステージ>のポイント

## ◆命をつなぐ行動のイメージ

それぞれのエリアでの「命をつなぐ」行動をイメージしておくことが重要。

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
	命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣		生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場	

### 命をつなぐ（想定シナリオ）

沿岸部	津波あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上層階・高台での持久戦：複数波・余震を前提に、津波警報が解除されるまで、安全な上階で共同避難する。</li> <li>・低体温／熱中症対策：濡れた衣服の交換、毛布や段ボールで保温・遮熱。夜間の体温維持を最優先。</li> </ul>	<p><b>【共通】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資源の計画配分：手元の水・食料・防寒資材をまとめて把握し、時間割と配給ルールを決める。</li> <li>・衛生・トイレ運用：簡易トイレ（袋式）を設置し、排泄物は密閉・一時保管。手指消毒・うがいを徹底。</li> <li>・情報の見える化：掲示板で安否・医療ニーズ・配布時刻・救助要請先を共有。外国人には英語等で併記。</li> <li>・安全な水の確保：雨水の捕集やペットボトル再利用。煮沸・ろ過が可能な場合は実施し、未処理水の飲用を避ける。</li> <li>・通信の節約：省電力モードで短文連絡（家族へ所在のみ）。救助要請は緊急時のみ、上階から目視合図も活用。</li> <li>・火気・一酸化炭素対策：屋内での発電機・炭火・カセットコンロの使用は換気と一酸化炭素中毒防止を徹底。</li> <li>・代替通信の確保：防災無線・ラジオ・アマチュア無線、掲示板や連絡メモで情報を回す。</li> <li>・気温対策：真冬は重ね着と防風、真夏は日陰・水分・塩分補給。高齢者・乳幼児を優先的に保護。</li> <li>・ペット・家畜の管理：避難ルールと糞尿処理を決め、衛生環境を維持。</li> </ul>
内陸部	県道閉塞で孤立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資源管理の&lt;共同化&gt;：水・食料・燃料を見える化し等分配・共同炊き出し</li> <li>・班編成による共助：安否確認班、医療班、物資班、情報班を編成し、巡回</li> <li>・斜面・落石の警戒：余震時に危険箇所を点検。通行止め明確化と代替ルート設定。</li> <li>・救護体制：持病薬のリスト化、簡易救護所設置、ヘリ離着陸可能な広場の確保と目印づくり。</li> </ul>	
高知市周辺	長期浸水地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3階以上での&lt;共同避難運用&gt;：フロアごとに役割分担を決め、通路・階段の安全確保と転倒防止。</li> <li>・長期トイレ運用：袋式簡易トイレと保管場所の確保、消臭・手洗い動線の整備。</li> <li>・物資受け入れ窓口：ボート等からの受け渡し時間設定、搬送等の動線を決める。</li> <li>・カビ・衛生対策：濡れ物乾燥、換気、マスク・手袋着用。感染症予防の掲示。</li> <li>・生活情報の共有：排水見通し、避難所移動のタイミング、応急仮設住宅申請準備（身分証・罹災証明の手順）。</li> </ul>	
観光客	津波あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・所在登録：避難所・ホテルで名簿作成（氏名・連絡先・滞在先・言語）。旅行会社・船会社と連携。</li> <li>・多言語掲示：英・中・韓で行動原則を掲示（上階に留まる、戻らない、また、その優先順位など）。やさしい日本語も併記。</li> <li>・帰宅支援：交通の復旧順序に合わせ、段階的な送迎・再予約・払い戻しの案内窓口を設ける。</li> <li>・健康・メンタルケア：服薬継続の確認、ストレスケアの案内、通訳ボランティアの配置。</li> <li>・支払い手段の確保：キャッシュレス停止に備え、現金対応窓口と必要物資の現物支給を周知。</li> <li>・荷物の軽量化：必需品に絞り、貴重品・充電・雨具・防寒具を優先。</li> </ul>	

# 3-3. 地震発生後の<3ステージ>のポイント

## ◆生活を立ち上げる行動のイメージ

復旧段階の「生活を立ち上げる」行動をイメージしておくことも重要。

	～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
	命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣		生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場	

		生活を立ち上げる（想定シナリオ）	
沿岸部	津波あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生業の再開：漁船点検・修理、港湾のがれき撤去、旅館・商店の仮営業と衛生管理。</li> </ul>	<b>【共通】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・罹災証明の取得：被害認定の申請手順と窓口、必要書類の準備（本人確認・写真記録）。</li> <li>・応急仮設住宅の申込：入居優先の考え方、生活再建支援金・各種支援制度の案内。</li> <li>・家屋の応急修理・耐震補強：応急修理の申請、耐震診断と補強計画の策定。ブルーシート・応急木工、家財の選別・廃棄、衛生的な清掃。</li> <li>・通勤・通学・保育の再開：学校・保育の臨時再開、通学路の安全確認、学用品の支援。迂回・代替交通の案内、時差出勤・分散登校の実施。</li> <li>・心身のケア：住民サロンの設置、相談窓口の周知、孤立の防止。</li> <li>・事業継続：代替拠点の確保、BCPの見直し、発電燃料・資材の計画調達。</li> <li>・福祉・医療の定常化：巡回診療と薬の供給、介護サービスの再開、安否確認の定期化。</li> </ul>
内陸部	県道閉塞で孤立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道路啓開の継続：主要・生活道路の優先順位付け、物資輸送ルート確立。</li> <li>・農業の再開：水路の復旧、農機の整備、土砂・倒木の撤去、共同販売体制の再構築。</li> </ul>	
高知市周辺	長期浸水地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・排水・乾燥・消毒：家屋・店舗の乾燥、カビ対策、消毒の安全手順。</li> <li>・住まいの再建：応急仮設住宅での生活セットアップ（電気・水・通信）。移転・かさ上げの検討。</li> <li>・商店街・オフィスの再開：清掃・什器調達・仮店舗の設置、営業時間の段階的再開。</li> <li>・地域の合意形成：復興計画の共有、住民説明会、町内会・商店街の協働。</li> </ul>	
観光客	津波あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一斉帰宅の実施：交通復旧に合わせ、避難所・ホテルからの送迎と動線整理。</li> <li>・旅行手配の再構築：旅行会社・船会社・航空会社との連携窓口、再予約・払い戻しの支援。</li> <li>・書類の再発行：パスポート・身分証の再発行手順の案内、各国大使館・領事館との連絡。</li> <li>・保険・補償手続：旅行保険・荷物補償の申請支援、証憑の整理。</li> <li>・残留者支援：医療・言語支援の継続、生活必需品の提供、心理的サポート。</li> </ul>	

## 4. この後登場する「16人の物語（シナリオ）」を、なぜ読む必要があるのか？

～ 想像力のスイッチを入れ、あなたと大切な人を守る力に変える ～

この資料では、4つの区分で計16人の被災後の歩み（ストーリー）を詳細に描いています。

- ①沿岸部：津波襲来への対応
- ②内陸部：道路寸断による孤立
- ③高知市周辺：長引く浸水と都市機能停止
- ④観光客：見知らぬ土地での被災

**一見、「自分には関係ない」と思える物語の中にこそ、あなたと家族の命を救うヒントが隠されています。**

### ◆3つの「読む価値」

#### 1. 「大切な誰か」「自分自身」の姿を重ねる

人物の設定や被災場所が完全に自分に当てはまらなくても、どこか参考にできることはあります。

あなた自身、家族、隣人、友人は、似たような状況を経験するかもしれません。

「自分ならどうになってしまうか」

「離れて暮らす親ならどう動くか？」

「近所のあの親子をどう助けられるか？」

⇒多角的な視点を持つことで、地域で助け合う具体策が見えてきます。

#### 2. 「未来の自分」を予行演習する

災害はいつ、どこで起こるか分かりません。

・数年後、あなたも「高齢者」や「小学生の親」になっているかもしれません。

・旅行先で「観光客」として被災するかもしれません。

⇒立場を変えて疑似体験することが、将来の備えに直結します。

#### 3. 一般論になりがちなことを「生きた教訓」に変える

「浸水」「孤立」といった抽象的な言葉を、生活レベルの困難として理解できます。

・トイレ、食事、情報の遮断、心の葛藤。

・物語だからこそ記憶に残り、いざという時の「判断の軸」になります。

**「自分ならどうするか？」  
を語り合う、そのきっかけに！**

このシナリオに「正解」はありません。

読み終えた後、家族や仲間と

**「うちの場合はどうだろう？」**と話し合うこと。

**その会話こそが、最強の防災訓練**

**になります。**

# 5-1. 人物像・場面設定

区分	人物像				場面設定					
	職業他	年齢	性別	特徴・家族構成	被災場所	追加状況	ストーリーの強調点	対策有無の例示		
沿岸部	津波あり	① 漁業 (兼旅館)		70	男	夫婦2人	港		漁船の固定、宿泊者の誘導、避難所生活	避難訓練、罹災証明の知識
		② 小学生		7	男	父・母・姉・祖父母	学校	山付き	高台避難、家族との連絡、在宅避難	避難訓練、耐震補強
		③ 消防団員 (自営業)		40	男	妻・子供2人	自宅	真冬	陸開・水門の操作、避難誘導、防寒対策等	陸開・水門の閉鎖、避難誘導
		④ 看護師		35	女	夫・子供2人	災害拠点病院		入院者対応、BCP、トリアージ、停電・断水対応、疲労、家庭との両立	非常用発電利用、暫定トリアージ等
		⑤ 高齢者		90	女	1人暮らし	自宅	真夏	個別避難計画、津波避難タワー、福祉避難所	耐震補強、個別避難計画、暑さ対策
内陸部 (中山間地)	県道が閉塞し孤立	⑥ 農業		60	男	夫婦・母親	畑	真冬	県道閉塞、裏山崩壊恐れ、近隣宅避難	地域内訓練、備蓄、共助
		⑦ 公務員		30	男	妻・乳児1人	自宅		繁忙、交代勤務	耐震補強、参集訓練、交代勤務制
		⑧ 建設業		45	男	妻・子供2人	会社		道路啓開、BCP、交代制、自治体との連携	BCP、自治体との調整
		⑨ 高齢者		80	女	1人暮らし	自宅	負傷 感染症	応急手当、感染症対策、福祉避難所	地域のつながり、医療救護訓練、感染症対策

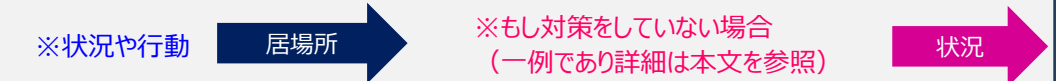
# 5-2. 人物像・場面設定

区分	人物像					場面設定			
	NO	職業他	年齢	性別	特徴・家族構成	被災場所	追加状況	ストーリーの強調点	対策有無の例示
高知市 周辺	長期浸水地域	⑩ 会社員 	45	男	夫婦・父親 (足が不自由)・高校生	オフィス	真夏	垂直避難、帰宅困難、家族安否	什器固定、備蓄、救出
		⑪ 商店(中心部) 	50	男	夫婦	商店街		避難誘導、津波避難ビル、情報提供、商店街再開	避難誘導、非常用、非常用持ち出し袋、事前の復興・再建計画
		⑫ 大学生(高知城付近) 	20	男	1人暮らし	大学		垂直避難、キャンパスも自宅アパートも浸水、みなし仮設住宅に転居	垂直避難、備蓄、大学の対応
		⑬ 高齢者 	85	女	1人暮らし	自宅	真冬	自宅垂直避難、個別避難計画、ボートによる救出	垂直避難、寒さ対策、個別避年計画
観光客	津波浸水あり	⑭ 国内観光客 	30	女	友人と2名で旅行	はりまや橋		店舗・市民の誘導、津波避難ビル、その後の受け入れ先	声掛け誘導、一時避難後の受入施設情報
		⑮ クルーズ船乗客※ 	65	女	外国人夫婦	高知新港客船ターミナル		港内高台避難、クルーズ船港内停泊	声掛け誘導、情報提供
		⑯ お遍路さん 	62	男	1人	沿岸部 国道		地元民の誘導、津波避難タワー、その後の受入先	声掛け誘導、一時避難後の受入施設情報

※高知港へのクルーズ船寄港は、令和7年度(今後の予定も含め)、108回(およそ3日に1回)。

出典：<https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/cruise7/>

# 6-1. シナリオ展開イメージ (沿岸部)



		～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
		命を守る発災時の居場所		命をつなぐ居住地・近隣		生活を立ち上げる居住地・近隣・仕事場
沿岸部 (津波あり)	①漁業 (兼旅館)	港 船に行かずに すぐに旅館へ 市場 もし漁船を固定 していたら 津波避難タワーへ 津波避難タワー 避難所	県外客 帰宅困難 自宅全壊 罹災証明手 続き 漁船損傷	県外客 帰宅開始 漁船修理 検討	応急仮設住宅 入居手続き 漁船修理開始	引っ越し 漁業再開 応急仮設住宅
	②小学生	学校 身を守る 教室 校庭集合 校庭 全員で 高台避難 高台 家族と再会 自宅の祖父母 も無事 避難所	自宅浸水せず 大きな損傷なし 自宅に戻る	停電継続 備蓄、役所の配給 停電解消 親は仕事復帰	授業再開	
	③消防団員	自宅 身を守る 家族の避難 自宅～避難ビル 消防団詰所 陸間～近隣 巡回 地域内 避難所	避難所・避難ビルを巡回 散水で延焼防止、物資仕分け支援	行方不明者捜索(継続) がれき撤去支援	仕入れネットワーク再構築 危険物撤去継続、店舗復旧計画 経営するスーパー～地域内	
	④看護師	病院 病棟の安全確認、BCP、トリアージ、重傷者集中管理 病院 トリアージなし 重傷患者対応遅れ	トリアージ継続、家族生活との両立 自宅～病院 家族支援なし 対応困難	断水対応、物資管理 自宅～病院 勤務平準化、 メンタルケアなし 燃え尽き・離職	職員メンタルケア、事後検証 事後検証なし	経験が次の災害 に生かされない
	⑤高齢者 (一人暮らし)	自宅 身を守る 自宅 個別避難計 画の支援者の 助けて避難 津波避難タワー 風通しの良い場 所で、日除けや 冷却グッズ使用 逃げ遅れ	自宅が床上 浸水 避難所へ 風通しの良 い場所で冷 却グッズ使用 体調不良	専門の支援者 がいる福祉避 難所に移動	罹災証明 申請(家 族)	県内の長女 宅へ避難

# 6-2. シナリオ展開イメージ (内陸部)

※状況や行動 → 居場所 → ※もし対策をしていない場合 (一例であり詳細は本文を参照) → 状況

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降	
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階			本格的な復旧段階
			命を守る発災時の居場所	命をつなぐ居住地・近隣	生活を立ち上げる居住地・近隣・仕事場			
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	⑥ 農業	畑	<p>安全確保の姿勢</p> <p>畑 → 自宅</p> <p>※地域内訓練なし</p> <p>負傷者見落とし</p> <p>※備蓄なし</p> <p>体調不良</p>	<p>真冬</p> <p>自宅に戻る家は若干の損壊で済む近隣安否確認</p> <p>県道が斜面崩壊で閉塞、孤立状況に。備蓄品で暖を取る</p> <p>訓練どおり、集落で相互に声掛け。備蓄品確認。余震で裏山崩壊の恐れ ⇒ 近隣宅に移動</p> <p>集落内近隣宅</p> <p>※地域内共助なし</p> <p>斜面被災の恐れ</p>	<p>斜面応急対策終了、県道通行可能。⇒ 避難所に移動</p> <p>避難所</p>	<p>停電解消したため、自宅に戻る。</p> <p>自宅</p>	<p>農業を徐々に再開</p>	
	⑦ 公務員	自宅 (休日)	<p>安全確保の姿勢</p> <p>自宅 → 自宅 (出勤準備)</p> <p>※耐震補強や対応訓練なし</p> <p>出勤不能又は出勤遅れ</p>	<p>自宅は倒壊等問題なし。マニュアルに沿って出勤準備。</p> <p>県道が斜面崩壊で閉塞 避難所開設</p> <p>仮眠を取りながら2交代で24時間稼働</p> <p>一日後に帰宅 10時間休息</p> <p>役場・現場・避難所等</p> <p>※交代勤務の準備なし</p> <p>長時間勤務による疲弊</p>	<p>県道通行可能になるまで 3交代で勤務</p> <p>役場/自宅</p>	<p>停電も解消し、交代勤務も解消</p> <p>役場/自宅</p>		
	⑧ 建設業	会社	<p>安全確保の姿勢</p> <p>会社 → 会社</p> <p>※BCPなし</p> <p>初動の遅れ</p>	<p>BCPに従って行動</p> <p>会社から体制説明</p> <p>会社に泊まる</p> <p>道路啓開作業</p> <p>自治体と連携</p> <p>家族は避難所</p> <p>現場と会社</p> <p>※協力企業との事前調整なし</p> <p>業務中断</p>	<p>道路啓開継続</p> <p>リソース確保の困難</p> <p>現場・会社・避難所</p> <p>※行政との連携なし</p> <p>復旧遅れ</p>	<p>道路が徐々に通行可能</p> <p>家族も自宅に戻る</p> <p>応急仮設住宅確保本格化</p> <p>現場・会社・自宅</p>		
	⑨ 高齢者 (一人暮らし)	自宅	<p>屋外に飛び出す</p> <p>屋根瓦の落下で負傷 自宅も半壊 隣人の車で移動</p> <p>自宅 → 医療救護所</p> <p>※地域のつながりなし</p> <p>負傷者見落とし</p> <p>※医療救護訓練なし</p> <p>手当なし</p>	<p>県道が斜面崩壊で医師来らず、看護師の応急手当</p> <p>隣人の助けで避難所に移動</p> <p>感染症対策の実施</p> <p>福祉避難所の開設に伴い移動</p> <p>避難所</p> <p>※感染症対策なし</p> <p>感染リスク大</p>	<p>罹災証明申請 (家族)</p> <p>福祉避難所</p>	<p>県内の息子宅へ避難</p> <p>県内の息子宅</p>		

# 6-3. シナリオ展開イメージ (高知市周辺)

※状況や行動

居場所

※もし対策をしていない場合  
(一例であり詳細は本文を参照)

状況

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る発災時の居場所		命をつなぐ居住地・近隣		生活を立ち上げる居住地・近隣・仕事場
高知市周辺 (長期浸水地域)	⑩ 会社員	オフィス	<p><b>真夏 (酷暑)</b></p> <p>安全確保の姿勢 キャビネット転倒せず</p> <p>会社</p> <p>※什器固定なし</p>	<p>大津波警報でビルの上層階に垂直避難</p> <p>周辺が1～2m浸水し、帰宅困難。備蓄品なし</p> <p>※備蓄なし</p> <p>体調不良</p>	<p>家族と連絡が取れ、高齢家族はボートで救出され、浸水エリア外に避難</p> <p>ビル周辺の排水が進まず、ビル内での長期籠城を覚悟。自宅も冠水し居住不能</p> <p>※救出遅れ</p> <p>死傷リスク</p>	<p>家族で浸水範囲外の避難所に移動</p> <p>高齡の両親は福祉避難所へ移動</p> <p>会社ビルの清掃が終わり仕事を再開</p> <p>避難所/会社</p>	<p>郊外のみなし仮設住宅に引っ越し</p> <p>借り上げ仮設/会社</p>
	⑪ 商店	中心部商店街	<p>安全確保の姿勢 商品散乱 建物倒壊せず</p> <p>店舗兼自宅</p> <p>※避難誘導訓練なし</p>	<p>商店街振興組合の訓練に沿って来街者に声掛け</p> <p>アーケード内</p> <p>逃げ遅れ</p>	<p>最寄りの津波避難ビル(オーテピア高知図書館)に来街者を誘導</p> <p>ビル周辺の排水が進まず、そのまま宿泊。貴重品・必需品は避難用の非常用持ち出し袋にあり。</p> <p>※持ち出しバッグなし</p> <p>貴重品浸水</p>	<p>ビル周辺の排水が進み、干潮時に帰宅するも、店舗兼自宅も冠水し居住不能</p> <p>夫婦で浸水範囲外の避難所に移動</p> <p>商店街の清掃を再開</p> <p>アーケード及び店舗の再建を振興組合で検討</p> <p>※再建の事前想定なし</p> <p>復旧遅れ</p>	<p>郊外のみなし仮設住宅に引っ越し 仮設店舗での営業実施</p> <p>借り上げ仮設/店舗</p>
	⑫ 大学生	大学(高知城付近)	<p>垂直避難 教室⇒研究棟の上層階</p> <p>教室</p> <p>※避難誘導訓練なし</p>	<p>備蓄品配布</p> <p>大学による情報トリアージ(デマ防止)</p> <p>逃げ遅れ</p> <p>※備蓄を1F保管</p> <p>津波で濡れる</p>	<p>避難生活が続く</p> <p>体調不良者はボートで病院へ</p> <p>※体調不良者移動なし</p> <p>健康を損なう</p>	<p>アパートも浸水 実家に一時帰省 その後市内の避難所</p> <p>実家/避難所</p> <p>※被災学生への住居提供なし</p>	<p>みなし仮設住宅に引っ越し 授業はハイブリッドへ</p> <p>借り上げ仮設/大学</p> <p>在学継続困難</p>
	⑬ 高齢者 (一人暮らし)	自宅	<p><b>真冬</b></p> <p>建物倒壊せず 大津波警報あり</p> <p>自宅</p> <p>※垂直避難知識なし</p>	<p>1Fが浸水 自宅2Fに避難</p> <p>毛布等で体を温める</p> <p>※寒さ対策なし</p> <p>体調不良</p>	<p>個別避難計画の支援者と連絡を取り、救助に備える</p> <p>消防の救助ボートで救助(非常用持ち出し袋持参)</p> <p>※個別避難計画なし</p> <p>救出遅れ(死傷リスク)</p>	<p>一時滞在場所</p> <p>避難所</p> <p>応急仮設住宅の入居申請</p>	<p>応急仮設住宅に入居</p> <p>応急仮設住宅</p>



# 7-1. シナリオ内容

## ①漁業兼旅館

### 【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 (津波浸水地域)	①漁業 (兼旅館)	港	<p>早朝の漁港内の魚市場で作業中、突き上げるような揺れに膝をつき、身構える。漁船の固定はしないで、即座に旅館に戻ると、停電で厨房は真っ暗。ラジオの警報に促されながら、従業員と宿泊客へ一斉声掛け。旅館建物は一部損壊し、水槽が割れて足元が滑る。駐車場は亀裂で車が使えず。船を見に行くと津波に飲み込まれるため、港には向かわずに、徒歩で避難タワーへ。途中、要支援の宿泊客を背負い、互いに腕を取り合って階段を駆け上がる。海が引き、黒い筋のような波が戻って港を呑み、船団と棧橋が押し流されるのを見て言葉を失う。炎天下で水分を分け合い、宿泊客名簿で所在確認を続けながら夜を迎えた。</p>	<p>タワー上階で宿泊者名簿の照合で一名の所在が不明。商店街側へ避難した可能性を記録し、タワーの掲示板に連絡先を書き残す。 下からは排水の遅れで悪臭が上がり、簡易トイレに長い列。食料は乾パンと即席味噌汁で済ます。 水の入手は困難。宿泊客の不安を抑えるため、時間を決めて情報共有・体操・水分補給を回すルーティンを導入。 夜間は蚊と蒸し暑さで眠れず、足のストレッチを続ける。港の状況は壊滅的との情報が入るが、全員の安全確保を最優先に、翌朝の避難所移動に備え、タワー上階で班分けを行った。</p>	<p>旅館とは少し離れたところにある自宅は全壊していた。避難所に移り、体育館の床で雑魚寝する。名簿と旅館予約システムのバックアップ紙を持参し、宿泊客の家族連絡に活用。 役所の職員や地域の人と協力し、衛生管理のため手洗い・発熱チェックの動線を作り、濡れた衣類の干場を確保。炊出しで温かい汁物が配られ、久しぶりの湯気に目頭が熱くなる。 被害写真の確認で旅館の一階が泥に埋まり、厨房機器は全損と判明。漁業組合から船の係留具流失・修理待ちの連絡。 役所に罹災証明の申請に行き、後日、応急仮設住宅の申請に着手。また、旅館従業員の生活再建の相談窓口を共有。 夜は余震に備えて避難袋と靴を枕元に置き、まだ帰宅できていない宿泊客の体調記録をつけ続けた。</p>	<p>応急仮設住宅の入居手続きをする。旅館再建のため、被害写真と罹災証明、見積、資金計画のファイルを作成。近隣の宿泊業者と情報交換会を開き、共同で客室清掃機材の共同購入や共同宣伝の原案を作る。漁船の修理の依頼を行なう。港の泥上げと道路の応急補修が進み、仕入れ先との連絡も再開。従業員の再雇用方針とシフト原案を作り、心身のケア日を設定。地域の祭りの代替イベント案を町内会と調整し、来訪者受け入れの安全基準を文書化。 夜は旅館修理の図面に目を通し、工期と仮設営業の両立案を練る。</p>	<p>応急仮設住宅に引っ越し、ようやく安心して寝られるようになる。自宅は、瓦礫撤去と消毒が進み、更地化へ。再建修理の設計打合せで耐水・耐震の仕様にする。旅館も、耐震・耐水仕様にし、非常電源、可搬式冷蔵設備、避難誘導サインの配置を強化。漁業は小型船の修理が終わり、朝の安全点検表を導入。旅館の仕入と予約は分散管理し、紙とクラウドの二重記録。地域の体験型プログラム（港ガイド、震災の教訓展示）を企画して安全教育も兼ねる。 資金繰りは厳しいが、月次の損益予測と資金繰り表を更新し、返済計画と助成申請の進捗を週次で管理。 季節の受け入れ人数を絞り、避難計画を宿泊者とチェックイン時に共有して運営を再開する。</p>
			<p><b>もし対策をしなかったら</b></p>	<p>●もし宿泊客への初動の避難誘導や要支援者の同行支援をしなかったら 津波に巻き込まれて重傷・死亡の危険が高まっていた。</p> <p>●もし船の固定等を行い、避難タワーへ早期移動しなかったら 漂流物や火災に巻き込まれて身動きが取れなくなった。</p>	<p>●もし水分補給・暑熱対策（時間管理での補給・日陰確保）を怠っていたら 熱中症や失神で介助不能になっていた。</p> <p>●もし衛生管理（簡易トイレの行列整理・手洗い動線）を整えなかったら 下痢・皮膚炎などの感染リスクが増大していた。</p>	<p>●もし罹災証明のこと（写真・名簿・被害記録）を知らなかったら 補助申請や再建資金の確保が遅れ、営業再開が困難になっていた。</p> <p>●もし宿泊客の安否連絡体制を作らなかったら 所在不明者対応が長期化し、風評とクレームが増えていた。</p>	<p>●近隣の宿泊業者と情報交換会を開かなかったら 希望も失い、復旧する術を失った。</p> <p>●もし応急仮設住宅や従業員の住まいの確保情報を確認しなかったら 従業員離職が進み、人手不足で復旧が停滞していた。</p>

# 7-2. シナリオ内容 ②小学生 【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 (津波浸水地域)	②小学生	学校	<p>授業前の教室で大きな揺れが来て、机の下に入る。校庭は地面が波打つように揺れ、先生の笛でしゃがみ込む。鉄棒が鳴り、砂場に砂煙。教室では本棚の本が落ちるが、先生の声に従いヘルメット着用。揺れが収まると、全員校庭に集まり、今まで行って来た訓練どおり、誘導旗に沿って高台へ列で移動。靴が脱げた友だちの手を取り、転ばないように肩を貸す。海側は白く泡立ち、潮が不自然に引くのが見える。高台に着いて点呼。背中防災ずきんが汗で重くなるが、みんなで水を分け合い、先生の話の静かに聞いた。点呼は名簿順ではなく列の順に変更し、抜け落ちを防ぐ。連絡カードで、先生が保護者連絡先を確認。</p>	<p>津波の水が引いた後、大きな被害を免れた学校に戻る。非常食はビスケツと水、トイレは体育館前に簡易型を設置。連絡がついた家庭は在宅避難、海側の家庭は避難所である体育館へ。家族の迎えが無い児童は、寝袋を並べ、先生が見回り。勉強道具は濡れたが、ノートの乾いたページに避難の記録を書き、クラス日誌を作る。友だちが不安で泣き出すと、先生が読み聞かせと軽い体操で気持ちを落ち着かせる。保護者と再会できた子から順に明日の移動計画を聞き、連絡カードの情報を更新した。クラス日誌には絵と言葉の両方で記録。水筒の補給は列を作らず班ごとに時間割。避難所の騒がしさを避けるため、図書コーナーを段ボール仕切りで作った。</p>	<p>自宅は事前に補強をしてあったので、倒壊せず、在宅避難することになった。4日目になっても停電は継続し、用意していたランタンや小型の蓄電池を使用。携帯は、非常用の手回し充電器で何とか充電できた。自宅近隣の避難所には子どもスペースが作られる。絵を描く机、折り紙、ボールなどあり。そこで、朝の短い時間に学校から配られたプリントで復習。手洗い場に列ができるので、班ごとに当番を決めて衛生管理。学校再開に向け、通学路の安全確認が進み、今後の集合場所を地図に書き込んだ。通学路マップに危険箇所印を赤×で記載し、雨天時の迂回路も青線で追記。</p>	<p>3週間を経て、クラスの友だちの一部は、仮設住宅や親戚宅からの通学が始まる。名札を新しく作る。教室は机の配置を変え、余震に備えて、落下防止の固定が強化された。避難訓練の振り返りを授業で行い、家族の連絡方法や集合場所を家庭で話し合う宿題が出る。友だちの家の片付けを手伝うボランティア活動も計画され、地域の人たちと顔を合わせた。家庭科の時間に非常持ち出し袋を点検し、乾電池の型番と本数をカードに書いた。</p>	<p>1ヶ月以降、学校が授業や行事の一部縮小する形で再開。地域に防災クラブができ、学校でも、避難経路をポスターにまとめた。校外学習は、高台避難の訓練を兼ねた、自然観察になる。心配事を伝えるための相談箱が廊下に置かれ、先生が毎日チェック。家庭では家具の固定と非常食の入れ替えを実施し、それを学習ノートに記録した。地域の避難訓練に親子で参加し、笛や懐中電灯の扱いを練習。ゆっくりと元の生活に近づきながら、非常時に備える習慣が身についた。防災クラブのポスターは廊下の低い位置にも掲示し、低学年でも読めるようふりがなを追加。</p>
			もし対策をしなれば	<p>●もし津波の避難訓練をしていなかったら 説明や理解に時間がかかり、津波で死傷する危険があった。</p> <p>●もし保護者の連絡カードを用意してなかったら 保護者の連絡先（携帯番号など）がわからず、安否の連絡が遅れた。</p>	<p>●もし水分補給・休憩の時間割を守らなかったら 脱水や熱中症で体調を崩していた。</p> <p>●もし衛生動線（手洗い・トイレ）を守らなかったら 感染症がクラス内で広がった。</p>	<p>●もし自宅の耐震補強をしていなかったら 建物が全壊又は半壊して、避難所生活することになった。</p> <p>●もし停電時の備えをしていなかったら 夜は暗く、様々な電気器具や携帯電話も使えなかった。</p>	<p>●もし仮住まいからの通学計画を立てなかったら 遅刻や長距離歩行で疲労が蓄積した。</p> <p>●もし家の片づけのボランティア（地域の共助）がなかったら 地域の復旧復興に時間がかかり、各世帯が疲弊した。</p>

# 7-3. シナリオ内容 ③消防団 【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 (津波浸水地域)	③消防団員(自営業)	海に近い自宅	<p>真冬の日曜朝、強い揺れ。妻と子ども2人を津波避難ビルへ縦方向避難させ、消防団詰所へ駆けつける。無線・防災行政無線は停電と揺れの影響で断続的に停止するため、ホイッスルと拡声器で路上の歩行者・ドライバーへ『高台へ！今すぐ！』と短い指示。海沿いの陸閘・水門は、津波到達までの猶予時間がないため、閉鎖に行かず、避難を優先する(※)</p> <p>津波避難ビル上層で名簿照合と要支援者の有無確認、夜間は防寒と見守り体制を班編成で維持。</p> <p>※陸閘等閉鎖について(大津波・津波警報時)  <b>【南海トラフ地震と思われる揺れを感じた場合】</b>                      長く、強い揺れを感じた場合は、陸こうの閉鎖作業は行わず、安全な場所に避難。  <b>【遠地地震等で津波到達まで時間のある場合】</b>                      ・津波到達予測時間までに、陸こう閉鎖時間(閉鎖時間+移動・避難時間+猶予時間)が確保できる場合は、原則、陸こうを閉鎖。                      ・津波到達予測時間までに、陸こう閉鎖時間が確保できない場合は、閉鎖作業は行わず避難。</p>	<p>町は広域停電。詰所の可搬可能な無線機・発電機・投光器を持ち出し、避難ビル・学校・公民館等の「命の拠点」を巡回。浸水域ではロープ渡し・ドローン情報・消防水利地図を組み合わせ、孤立者がいないか声出し確認。海沿いの火災延焼を警戒し、散水・延焼遮断の初期対応も実施。家族との連絡は安否札と掲示板で間接的に把握、団員間で休憩を交代制にし、低体温・凍傷を防ぐため毛布・カイロを優先配布。物資受け入れは商店主の経験を活かし、仕分けルール(水→即時、食→刻み配布、燃料→夜間優先)を徹底。</p>	<p>行方不明者捜索・安否確認を継続。自宅は床上浸水、家族は高台の親戚宅へ一時避難。団として陸閘・水門の再点検を行い、漂着物・油膜等の監視を実施。地元建設業者と連携し、生活道路のがれき撤去・通行帯の確保。避難所では、能登半島地震の教訓を踏まえ、衛生動線(手洗い・簡易トイレ・生活ごみ)を分離し、感染症対策を支援する。物資は「見える化棚」にし、誰でも取りに行ける仕組みで列混雑を軽減。</p>	<p>商店の在庫・仕入れネットワークを再構築。移動販売車を借り上げ、避難所と高台集落を巡回し、現金・物々交換等を併用。消防団活動は危険物撤去・防火巡回に移行。陸閘・水門の被害箇所は仮復旧計画を行政に提案し、次の高波・余震への備えを強化。家族の生活再建は応急仮設住宅申請・罹災証明の写真整理・記録台帳づくりを夜間に進める。</p>	<p>地域の防災訓練を再開し、津波避難・陸閘閉鎖を組み込んだ統合訓練シナリオを作成。店舗は耐水・耐震改修計画に着手し、非常用電源活用の冷蔵設備、持ち出し訓練等の導入を図る。消防団は教訓集を作り、海沿いの要配慮者名簿・連絡網・物資拠点の見直しを住民と共有。観光客向けの英語・中国語避難案内サインの設置を商店街と推進。</p>
			もし対策をしなければ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 陸閘・水門の閉鎖に無理をして対応したら 自分自身の避難が間に合わず津波に巻き込まれる。</li> <li>● 避難誘導を遅らせたなら 路上滞留で巻き込まれ、死傷リスク増大。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 停電対策(発電機・投光)が不足していたら 夜間の避難所安全確保ができず事故・盗難増加</li> <li>● 休憩・防寒の計画をしなかったら 低体温・凍傷・体調悪化で活動継続不能。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 衛生動線の分離をしなかったら 感染症拡大、避難所機能が麻痺。</li> <li>● 道路上のがれき撤去に未着手だったら 救援・物資の流入が遅れ、孤立長期化。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 罹災証明の記録不足だったら 支援金・仮設入居が遅れ生活再建が停滞。</li> <li>● 陸閘・水門の仮復旧提案をしなかったら 次の高波・余震で再被災。</li> </ul>

# 7-4. シナリオ内容 ④看護師 【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・職場		
沿岸部 (津波浸水地域)	④看護師	災害拠点病院 (病院自体は浸水せず)	<p>夜勤明け直後に発災。市街地は浸水するが病院は高台で無事。自分は、入院患者の安否や状況の確認を行った後、病棟を同僚に任せBCPのトリアージチームとしてアクションカードに沿い即応。救急外来前にゾーニング（赤/黄/緑）を設け、ドクターの指示でトリアージを開始。また、止血・保温・気道確保を実施。重症は蘇生エリアへ、歩行可能はグリーンへ誘導。指揮系統を一本化し、受入上限と待機列を可視化。酸素・吸引・モニタの優先復旧、エレベーター停止のため階段搬送動線を確認。家族へは災害用伝言で安否連絡を試みるが通信難。夫と近居の両親に子どもの避難と保護を委ね、自分は現場継続。</p>	<p>広域停電が続き、医師は少数。看護師中心で暫定トリアージも含めた処置を継続。衛星・防災無線で医師の遠隔指示を補完。ベッドコントロールボード（病床管理ボード）で病棟負荷を見える化し、ICU/救急/手術部での人員が再配置される。酸素・ボンベ・ディスプレイ在庫は台帳でローテーション配分。 薬剤は代替リストで投与継続、透析・在宅酸素・インスリン患者の名簿化と受け入れ導線を整備。家庭では避難生活が長引き、子どもの夜泣きや学習中断、夫・父母の疲労が蓄積。家族には定期的に連絡をし、自分と家族で声を互いに聞くようにする。いったん帰宅できたのは、3日目の朝だった。</p>	<p>停電は解消へ向かうが電子カルテ障害・断水が残存。紙トリアージ票と看護記録で連続性を担保。避難所巡回看護で慢性疾患の急性増悪を抑止し、退院支援カンファで在宅移行を加速。全職員に休憩/栄養補給を組み込み、仮眠スペースを拡充。職員用の心身のケア（相談室など）を充実させるが、家庭への帰宅が数日に一度。子どもから「また行っちゃうの?」と問われ、抱きしめて出勤する自責が続く。</p>	<p>診療は段階的に通常化する一方、家庭への負担はピーク。子どもの情緒不安定、夫の勤務調整と家事負担、父母の体力低下。自分は勤務平準化や後輩支援・避難所支援で役割増。深夜帰宅は家族が就寝中で会えず、孤独と罪悪感が募る。夫の「今はみんなで乗り切ろう」という言葉に支えられつつ、短時間でも家族時間（朝食、登校前の会話）を捻出。院内では院内保育の時限拡充や柔軟シフトを提案し、同じ悩みを抱える職員の声を拾い上げる。また、地域連携による退院や最寄りの病院への転院を支援する。</p>	<p>看護主導の事後検証を実施し、BCP/アクションカードを改訂（燃料・断水・紙運用・多言語・要配慮者・勤務平準化・職員ケアの制度化）。家庭では通学再開・生活再建に合わせ、夫・祖父母と負担を再配分。帰宅後の短い散歩や週1の家族時間を固定し、職場では面談・ピアサポート（当事者同士の支援）・復職支援を仕組み化。「家族の支えがあったから乗り越えられた」という実感を次の災害に生かすべく、家族支援の教訓（育児・介護・通勤支援）を院内で共有することに取り組む。</p>
			<p><b>もし対策をしなければ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●動線分離・ゾーニングなし 受入口が混乱し、重症搬送が滞る。</li> <li>●家族の支援なし 育児中の職員が離脱し、看護配置が一層不足。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ベッドコントロール・在庫台帳がない ICU/酸素/ディスプレイの枯渇、誤配分。</li> <li>●休養・栄養・仮眠の管理なし 判断ミス・事故増加。家族側の保育支援がなければ欠勤・離職が加速。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●紙運用・断水時動線の準備なし 記録断絶・投薬ミス・衛生悪化。</li> <li>●職員ケア軽視 バーンアウト・PTSD（心的外傷後ストレス障害）兆候の見逃し、離職前倒し。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●勤務平準化・柔軟シフト・院内保育を整えない 育児世代の欠勤・離職が増え、外来/手術再開が遅延。</li> <li>●退院支援・地域連携の遅れ 病床詰まりで救急受入を圧迫。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●事後検証とBCP改訂、災害時の職員ウェルビーイング（心身の健康と幸福追求）の制度化を怠る 次災害で同じボトルネックが再発、病院の機能低下と地域の信頼低下。</li> </ul>

# 7-5. シナリオ内容 ⑤高齢者（一人暮らし）【沿岸部（津波あり）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
沿岸部 (津波浸水地域)	⑤高齢者 (一人暮らし)	自宅	<p>テレビから緊急地震速報が流れ、その後すぐに突き上げる揺れを感じた。壁や天井の一部が剥がれたが、建物の補強を3年前にしていたので、倒壊しなかった。戸棚は固定していたため倒れず。</p> <p>メガネと薬袋を首から提げ、個別避難計画の支援者に助けていただき、津波避難タワーの上まで連れて行ってもらう。</p> <p>海が吠えるように近づき、集落に津波の水が押し寄せるのが見える。手の震えが止まらないまま、夕方の風の冷たさに肩をすぼめた。タワーの最上階に着いて、名簿に名前を書いた。</p>	<p>2日目、簡易トイレへの移動にも時間がかかる。支援者が腕を取り、手助けしてくれる。自力で歩行が難しいため、避難所への移動計画に配慮が加わった。夜は蒸し暑く、うちわで風を送っても眠れない。配られた経口補水液で喉を潤し、足の痙攣を防ぐためゆっくりと足首を回す。津波の水が引き、道路が通れるようになった翌日、役所の車で避難所へ移動する段取りが決まり、支援者協力の下、自宅経由で移動することになった。</p> <p>自宅は1階の半分くらいまで浸水してめちゃくちゃだったが、2階に置いていた避難用のバッグを支援者が持ち出し、避難所に向かった。避難所では、トイレまでの距離を短くするため出入口近くに場所を確保したが、食事や入浴等の支援が必要のため、できれば福祉避難所へ移りたいと申し出た。</p>	<p>避難所では風通しの良い場所に席を作ってもらい、冷たいタオルで首筋を冷やす。自宅が床上浸水で住めないため、罹災証明用に写真を撮ると手続きが進むと教わり、支援者をお願いして記録を残す。写真撮影は玄関・居間・台所の三箇所を基本に、床の水位痕も記録。福祉避難所への移動が決まり、荷物と薬をまとめて車に乗る。夜は扇風機の風に助けられ、ようやく眠りが戻ってきた。</p>	<p>福祉避難所は静かで、介護支援者の声掛けに安心する。入浴の順番や食事時間が決まり、体力が戻るにつれて歩行練習を再開。長女から電話があり、今後の住まいの話をする。役所の窓口で罹災証明の申請書類を受け取り、支援者同行で提出。写真の印刷と家の片付けの段取りを相談し、必要な手続きのメモを枕元に置く。連絡メモは大きい字で書いて枕元に貼り、電話番号は太字にした。3週間目に入り、福祉避難所を出て県内の長女宅で一時暮らすことになった。</p>	<p>長女の家身を寄せ、通院と手続きの付き添いを受ける。自宅に戻るには1階を復旧する必要があり、その段取りを長女と一緒に検討する。長女の家付近の地域の見守りネットワークに登録し、相談窓口や地域の交流会の情報を得る。写真や書類が整い、支援金の手続きが進むにつれ、心が少し軽くなる。</p>
			<p><b>もし対策をしなれば</b></p>	<p>●もし耐震補強をしていなかったら 自宅の倒壊で死傷していたかもしれない。</p> <p>●もし個別避難計画を作成していなかったら 支援者がいないと1人では速やかに避難できないため、津波に巻き込まれていたかもしれない。</p> <p>●もし真夏にタワーに水の備蓄がなかったら 避難はできても脱水症状を起こしていたかもしれない。</p>	<p>●もし非常用持ち出し袋を1階に置いていたら 津波の水で使えなくなったり、どこかに流されていたかもしれない。</p> <p>●もし福祉避難所の存在も知らず、移送を申出なかったら 一般避難所の暑さ・混雑で体調が大きく悪化したかもしれない。</p>	<p>●もし罹災証明の申請をしなかったら 住宅支援の優先度が下がり生活再建が困難になったかもしれない。</p> <p>●もし自宅被害の写真記録を残さなかったら 被害認定で不利になったかもしれない。</p>	<p>●もし長女と連絡がとれなかったら 福祉避難所での集団生活が長期化し、身体的・精神的な負担が増加したかもしれない。</p> <p>●地域の見守りネットワークに登録しなかったら 慣れない土地で長女以外の人との交流がなくなり、孤立していったかもしれない。</p>

# 7-6. シナリオ内容 ⑥農業【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部（中山間地域） （県道が閉塞し孤立）	⑥農業	畑	<p>畑の土が波打ち、足元の畝が崩れる。トラクターを止めて夫婦で身を屈め、頭を守る。裏山の斜面に土砂の割れ目が走り、落石の音。揺れが収まった後、軽トラックまで行き、ラジオを付けると、避難を大声で呼びかけるアナウンサーの声。閉塞の危険が少ない道で自宅に戻る途中、余震で電柱が揺れ、瓦が落ちる音に身をすくめる。家の柱は持ちこたえ、高齢の母も無事だったが、棚の瓶が割れて床が滑る。隣にあるビニールハウスに一時移動。停電と断水で、不自由を感じる。携帯はかろうじてつながり、高知市内にいる息子に安否を伝えた。</p> <p>ハウス内で、備蓄していた水を焚火にかけて湯を沸かし、体を温める。隣近所からの声がしたので、協力して、以前集落の防災活動で行ったとおり、集落内の安否確認を行う。内、自宅での転倒で負傷した人が見つかり、手当てをする。夜は、集落内の見張りを交代で続けた。また、山水を利用している人の自宅で、水を分けてもらう。</p>	<p>2日目、集落で声掛けし、飲食料や市販薬の相互支援（共有）を行う。県道は斜面崩壊で閉鎖し、携帯は今日は圏外表示になる。県道の閉塞は、大雨でもこれまで度々起きており、その都度皆で助け合うことが習慣化していたため、不安は少なかった。</p> <p>集落の集会所に保存されていた非常食と水が配られる。裏山の斜面の様子を見に行き、崩落の兆候があることがわかったため、ビニールハウスから出て、近隣の家に移動した。夜は冷え込み、湯たんぽ代わりにペットボトルに湯を入れて布で巻き、足元を温めた。集会所では、在庫を一覧にして、時々在庫の数字を更新した。裏山の見回りは二人一組で、時々行った。</p> <p>携帯で役場と連絡が取れ、集落内の安否を伝えた。携帯の充電は、集落内のある家にあつた手回し充電器を、順番に借りて充電した。</p>	<p>4日目、役場と集落をつなぐ県道斜面の応急対策が終わり、避難所に行けるようになる。役場からの連絡で避難所が開いたと知らされ、集落の代表が先に様子を見に行く。斜面は、土のうと水抜きで引き続き安定を図っているが根本的な対策が必要。</p> <p>集落の代表から、各自が農機具や倉庫など、農業関係の被害を写真と共に記録しておくように言われた。</p> <p>3食は、共同炊事で、備蓄品で温かい汁物を作り、体を温める。</p> <p>自宅は、倒壊していないが、ライフライン（電気・水）が復旧していない中、高齢の母の健康を考えて、家族で避難所に移動する。</p>	<p>半月後、県道が仮復旧し、役場に行けるようになったため、罹災証明と支援相談を進める。家の片付けを始め、割れた瓶の掃除と床の消毒をし、畑は水路の詰まりを直した。</p> <p>停電も解消し、水も出るようになったため、避難所から自宅に戻る。</p> <p>苗の再手配を仲間と分担。倉庫の棚を固定し直し、落下防止の金具を追加。集落掲示板に作業計画と安全確認のチェック表を貼った。集落内の状況・健康確認、情報交換を兼ねて、朝のラジオ体操を習慣化し、困っている人がいないかを確認しながら、徐々に日常に戻るように努める。</p>	<p>1ヶ月以降、農業を徐々に再開。収穫計画を見直し、出荷は共同便でまとめて運ぶ。水路の土砂を定期的に掻き出し、斜面の監視を続ける。</p> <p>納屋にカセットガスで動く小型の発電機と工具の置き場を整え、次の災害に備えるようにした。</p> <p>家族で避難経路の再確認。販売先へ被害と再開予定の連絡を徹底し、品質管理表を新しく作る。季節の変わり目に向け、種と肥料の補充を進め、作業の安全基準を文書化した。</p> <p>役場のすすめで斜面の安全対策として雨量計が配られた。斜面監視は雨量計のしきい値を設定し、閾値超過で作業中止にするようにした。特に危険度の高い、住宅に接する斜面は、今後斜面の変動を監視する装置が設置される予定。</p>
			もし対策をしなければ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし集落内で声掛けと安否確認の訓練をしていなかったら 負傷者の見落としや孤立死の危険が高まった。</li> <li>●もし閉塞の危険が少ない道を知らなかったら 二次災害に巻き込まれていたかもしれない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし備蓄の共同管理や体温保持を怠ったら 低体温・脱水で行動できなくなった。</li> <li>●もし危険斜面への認識が不足していたら 転落・土砂災害の危険が増えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし役場と各集落の緊急連絡手段が無かったら 情報の入手や対応が遅れた。</li> <li>●もし農機・倉庫被害の記録を取らなかったら 補助申請や保険が認められず再開が遅れた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし通行再開後に罹災証明と支援相談を進めなかったら 資材手当ができず収穫機会を逃した。</li> <li>●もし共助の仕組みがなかったら 集落住民の健康確保や仕事の再開に影響を及ぼした。</li> </ul>

# 7-7. シナリオ内容 ⑦公務員【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	⑦公務員	自宅(休日)	<p>日曜日の朝、自宅でまだ寝ている際に強い揺れがある。妻と生後6か月の乳児を起こして、寝室の隣にあるダイニングテーブルの下に一緒に入る。築10年くらいのアパートなので、持ちこたえる。揺れは長く、南海トラフ地震の発生を直感する。海沿いの地域は大丈夫だろうか。</p> <p>揺れが収まった後、スマホを見るが、停電で自宅のwifiも停止。キャリアの電波は不安定ながら届いているが、ネットニュースや天気予報アプリが読み込めない。充電が無くなると困るので、ラジオを付けるが、何年も使っていないため、電池が切れている。妻が車でラジオを聞いて！と叫ぶので、そうすると、高知県全体で、震度6強、ところによって震度7も出ていて、アナウンサーが津波からの避難を大声で呼びかけている。家の倒壊は免れたが、棚の書類が散乱。</p> <p>家族の安全を確保し、お隣の人にもしもの時の支援をお願いして、役場の初動対応マニュアルに沿って出勤。道路は一部寸断で迂回、庁舎では災害対策本部が立ち上がる。初動は各課が持ち場へ。避難所開設、物資の受入、情報整理、要支援者リストの更新。夜まで詰め、仮眠スペースを廊下で作る。情報班・物資班・避難所班の三班に分け、連絡はホワイトボードに時刻で記録。仮眠場所には耳栓とアイマスクが配布された。</p>	<p>2日目、能登半島地震での疲弊を教訓に、BCPに基づいて、二交代での24時間体制を徹底するように町長から指示が出る。県道閉塞で現場への移動に時間がかかり、無線で連絡を各課に回す。徐々に届く支援物資は、選別に時間がかかり、車両も不足して、町内の輸送の体制が整わない。</p> <p>避難所の混雑緩和策としてスペース区分、衛生動線、掲示板の整備。広報は定時のラジオ告知とSNSの同報で二重化。個人の疲労管理を徹底し、食事・休息の強制時間を設定。</p> <p>3日目の朝になって、いったん帰宅し、家族の顔を久しぶりに見て、自宅で寝る。</p>	<p>4日目、三交代へ移行。勤務時間は減ったが、24時間体制は続いているため、夕方や真夜中からという、平常時にはない勤務が続く。停電が続いており、役場の非常用発電機の燃料を補給して切らさないようにするために、協定先の業者で最優先での供給を依頼。</p> <p>また生活ごみ以外の災害廃棄物の処理対応が本格化する。罹災証明の仮受付を開始し、写真・位置情報の確認体制を整える。支援金の案内パンフを作り、窓口の混乱を減らす工夫。現場からの要望は一覧化してBCPの非常時優先業務の優先度を見直し、資源を再配分。夜の勤務のため、庁舎で短時間横になり、翌朝の調整会議に引き継げるように備えた。</p> <p>停電が1週間後によりやく解消し、役場での仕事や家庭生活の利便性が飛躍的に改善した。</p>	<p>3週間後、交代勤務を終了し、通常の勤務体制に近づく。避難所統合と福祉避難所の運用改善、申請窓口の増設が進んだ。</p> <p>道路の仮復旧に合わせ、生活再建に関する相談会を開催。地域のボランティア調整と、民間との協定活用で、救援物資の配送を安定化した。内部では被災経験の記録作成も着手。</p> <p>昨年度までに作成していた、事前復興計画に基づいて、住民説明会に向けた準備を開始。応急仮設住宅用地として、町内の道の駅の駐車場、陸上競技場を検討。</p>	<p>1ヶ月以降、復旧段階へ。住宅再建支援、応急仮設住宅の入居調整。インフラ復旧の進捗管理を可視化し、週次で公表。住民説明会を定期開催し、復興に関する課題の掘り起こしと改善を迅速化する。</p> <p>災害対応の記録を整理し、次年度に向け、災害対応の課題を抽出。マニュアル改訂と訓練計画に反映する。</p> <p>BCP記載の非常時優先業務中心の対応から、BCPに記載されていない通常業務を徐々に増やし、平常時の対応に向かう。</p> <p>職員の疲労回復を図るため、休暇の分散取得とメンタルケアを推進。</p> <p>家族と過ごす時間も何とか取れるようになった。</p>
			もし対策をしなければ	<p>●もし自宅が旧耐震だったら 家族が負傷し、出勤自体ができなかったかもしれない。</p> <p>●もし初動対応マニュアルを読んだことがなく、災害時の参集基準も理解していなかったら 参集が遅れて、町民の命を守る初動の役割が果たせなかった。</p>	<p>●もし交代勤務を取り入れなかったら 過労で判断力が低下し、事故やミスが起きた。</p>	<p>●もしBCP記載の非常時優先業務を無視して、感覚的に目の前の要望に対応していたら 最も重要なことに人手が割けず、時間がいくらあっても足りない状況になってしまうかもしれない。</p>	<p>●もし事前復興計画を作成していなかったら 災害後の復興のイメージが庁内・また住民との間で共有されていないため、合意形成から始めることになり、復興により時間がかかった。</p>

# 7-8. シナリオ内容 ⑧建設業【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	⑧建設業	会社	<p>昼過ぎ、強烈な揺れが突然襲う。会社事務所内で机の下に身を隠し、揺れが収まるまで耐える。社内は書類が散乱し、棚が倒れるが、耐震補強済みの建物は倒壊せず。社員全員の安否確認をBCP記載の行動マニュアルに従い実施。携帯電話は繋がりにくいが、社内無線で連絡を取り合う。停電と断水になり、家族の安否が気になる。1時間ほどして会社から、周辺の状況と今後の対応について説明を受ける。高知市方面とつながる県道は土砂災害で、閉塞しているという。帰宅が困難になることを想定し、社内備蓄の水と食料を確保。夕方、家族と連絡が取れ、自宅の建物は無事と確認し安堵する。自治体からの初動情報は遅れがちで、ラジオで各地の被害状況を把握。余震を想定し、社員同士で夜間の安全確保を話し合い、簡易寝具で仮眠を取る。</p>	<p>翌日、余震が続く中、県からの要請で、主要県道の斜面崩壊による閉塞箇所3か所の緊急除去作業を開始する。BCPに基づき、同業者の協力も得て、重機と燃料を最大限確保し、社員の班編成をして現場へ向かう。道路啓開は地域の物流と救援物資輸送に直結するため、夜間のリスクを避け、日中の作業を連日（交代制）で進める。昼頃に、携帯の電波が一時的につながったので、LINEを使い、家族宛てに「避難所に行けるのか、当面の食べ物はあるか等」を伝えた。社内ではポータブル発電機を稼働し、通信と照明を維持。社員の疲労を考慮し、引き続き交代制を徹底する。現場では自治体職員と連携し、閉塞区間が通行見込みを地元住民に伝達。地域からの差し入れが士気を高めるが、作業に必要な燃料不足の不安は続く。</p>	<p>4日目以降も、閉塞箇所が複数あり、道路啓開作業は続くが、燃料不足や資材調達に対応に時間がかかる。幸い、BCPの作成時に契約した燃料供給業者との連携が功を奏し、必要量を確保できる。少しずつ通行可能箇所ができ、地域住民からの感謝の声が現場に届く。一方、停電と断水が長引き、家族は避難所での生活を続けるが、疲労が増す。会社では、社員の健康管理を重視し、1週間に1日は必ず休むことを徹底する。過去の地震の教訓を踏まえ、重機の故障に備えた予備部品の確保が役立つ。自治体と予め計画していた、優先復旧路線の選定が功を奏し、順序立てた道路啓開ができ、自助・共助・公助を生かした地域防災の重要性を再認識する。</p>	<p>地震から2週間を経て、幹線道路の啓開はほぼ完了し、地域の交通が回復する。会社は次の段階として、被災した公共施設や生活道路の応急復旧に着手する。社員は通常業務に戻りつつ、復旧工事に従事。家族は電気・水道の復旧により、避難所から自宅に戻る。会社では、今回の緊急対応を振り返り、今後のために、改善点を洗い出した。県と地元建設業者の調整の会議に参加し、建設業者としての役割を確認。それを踏まえて、会社では、長期的な復旧に備えた人員計画を作成する。</p>	<p>応急仮設住宅の整備も本格化する一方で、公共工事以外に、地元企業や地元住民の建物の修理依頼が増える。ただし、人材と資材など、リソースの確保が追いつかず、十分な対応ができない。一方で会社は、災害対応で得た経験を活かし、BCPを改訂。社員教育を強化し、次の災害に備える。地域では、斜面崩壊対策や避難路整備の計画が進む。家族は徐々に平常時の生活に戻り、備蓄品を再補充する。集落内では、県内・県外へ避難し、まだ戻れない人も多い。自治体では、転出者が戻るように、住宅の清掃や再建の支援を行っている。</p>
			もし対策をしなければ	<p>●もしBCPに基づく安否確認が無かったら 社員の所在不明で救助が遅れた。</p> <p>●もし社内備蓄と簡易寝具を準備しなかったら 帰宅困難時の安全と健康確保が問題になった。</p>	<p>●もし重機や燃料確保の事前の調整が無かったら 道路啓開が遅れ、救援物資輸送が滞った。</p> <p>●もし自治体との情報共有を怠ったら 通行可能区間の周知が遅れ、住民の不安が増大した。</p>	<p>●もし予備部品の準備していなかったら 重機故障で作業が中断した。</p> <p>●もし優先復旧路線の調整をしなかったら 復旧の順序が混乱し、物流が停滞した。</p>	<p>●もしBCPの改善点を検証しなかったら 次回災害で同じ問題が再発した。</p> <p>●もし行政との調整会議に参加しなかったら 連携不足で復旧が遅れた。</p>

# 7-9. シナリオ内容 ⑨高齢者（一人暮らし）【内陸部（県道が閉塞し孤立）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
内陸部 (中山間地域) (県道が閉塞し孤立)	⑨ 高齢者 (一人暮らし)	自宅	<p>強い横揺れを感じた。自宅が昭和30年代に建てた古い家屋（旧耐震）のため、倒壊を恐れて外へ飛び出したが、落下してきた瓦で負傷する。揺れが収まった後、自宅は半壊状態。額の切り傷からの出血を押さえながら隣人に助けを求める。日頃から親しい関係の隣人は、すぐに車を出してくれた。車で医療救護所へ搬送される途中、道路が各所で斜面崩壊などにより通行止めになるのを見る。何とか医療救護所に到着したが、医師はまだ駆けつけることができず、看護師から応急手当を受ける。止血後、毛布で体を包み、葉袋とメガネを首から提げ、紛失防止を図る。その後、隣人の助けで、隣接する避難所に向かう。県内にいる息子に電話をしたがつながらない。不安なまま夜を迎えた頃、息子から電話があり、状況を伝える。</p>	<p>避難所では、インフルエンザの感染対策として、密度を下げるために、間隔を広げる。また、マスクを受け取ってつけた。 食事は柔らかかめを選び、体調記録をスタッフと共有。夜は冷え込み、カイロを腰に貼り、毛布を肩と膝に掛ける。 寝泊まりが不安なので、医療救護所に連れて行ってくれた隣人が引き続き付き添ってくれた。水分は少量を細めに摂り、脱水防止のため塩分を補給した。さらに、服薬時間を紙札に書き、見えやすい位置に置いて飲み忘れを防ぐことにした。</p>	<p>福祉避難所開設の知らせを受け、体調評価後、衰弱が見られたことから、専門職による福祉支援者が必要と判断され、福祉避難所に移動。静かな部屋で睡眠が取れ、血圧も安定。 罹災証明は家族に依頼し、写真と書類を準備。撮影は玄関・居間・台所の三箇所を基本に記録。 医師の巡回で額の傷の経過を確認し、消毒と絆創膏交換を続ける。 今後の長期的な対応を考えて、福祉避難所から応急仮設住宅に行くよりも、町外の息子のもとにいったん行く方が良いと考え始める。</p>	<p>県道仮復旧で息子と合流し、生活の場を移す計画を立てる。半壊した家の片づけは社会福祉協議会を通じてボランティアに依頼し、危険箇所をテープで封鎖。自宅を修理して再度住むか検討を始める。  福祉避難所から息子宅に移動。額のケガはほぼ完治した。</p>	<p>息子宅での生活に慣れ、通院と手続きが安定。 住み慣れた故郷や自宅を放置する気になれず、自宅修理の見積を取り、修理をして故郷に戻る方向で計画を進めることにした。計画するために役場の相談窓口で金銭的な支援を受けられることも知った。再建計画には資金繰りと工期調整を含め、次の災害に備えた耐震補強も検討する。  息子宅では、散歩と体操で体力維持を図り、体力低下を防ぐ。</p>
			もし対策をしなかったら	もしインフルエンザの対策（密を避けること）をしなかったら	もし福祉避難所へ移動しなかったら	もし自宅の片づけを社会福祉協議会を通じてボランティアにお願いできなかったら	もし自宅の再建計画について行政の相談や支援を受けられなかったら
	揺れの際中に自宅内に留まり、半壊する中で重傷を負っていた可能性がある。 もし隣人が災害時に助けることや医療救護所に行くことを知らなかったら	クラスターの発生につながる可能性がある。	静養が取れず、身体的・精神的負担が増したかもしれない。 もし罹災証明の重要性を知らず、後回しにしていたら	安心して息子宅に一時避難できなかった。	公的支援が遅れ生活再建が困難になった。	公的支援が遅れ生活再建が困難になった。	公的支援が遅れ生活再建が困難になった。

# 7-10. シナリオ内容 ⑩会社員【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 （長期浸水地域）	⑩会社員	オフィス	<p>真夏の勤務時間中、大きな揺れの中、ビル1階にあるオフィスのキャビネットは固定が効き、転倒はしなかった。いったんデスクの下に潜って頭を守る。全館の緊急放送で、大津波警報が発せられたことを知り、上層階へ垂直避難する。市内の低層の店や事務所は大丈夫だろうか…エレベーターは停止しているため、非常階段で移動する。</p> <p>1時間も経たないうちに、ビルの回りでは膝下の浸水が始まり、周辺道路は通行不能。家族とは連絡がつかず、社内の安否確認で自分の状況を共有した。ラジオから、高知県内の沿岸部が大きく浸水し、山間部でも道路が寸断されているとの情報。ビルの外は市内の中心部全体が水に浸かっているという信じられない光景が広がる。家族とは、地震発生後3時間してようやくSNSで互いの無事を確認したが、自宅の2階にいて、1階が浸水し、身動きが取れないと聞く。社内では非常食を配り、夜は会議室で仮眠。安否確認は部署横断の表で共有し、体調不良者を会議室へ誘導。非常食は水分の多い物から配布し脱水を防止。</p>	<p>2日目、空調が停止し、とにかく暑い。しかし、ビル周辺の排水が進まず帰宅困難。ビルに備蓄された飲料と毛布を配分する。震度5くらいの余震があり、社員の一人が階段室で転倒し、ショックで心臓が停止、こちらの呼びかけに答えられない状況となったため、半年前に消防署から指導を受けたことを思い出し、心臓マッサージを実施。依然、心拍の回復が見られないため、AEDを取り出し、音声ガイドに従ってショックを与え、蘇生を試みる。幸い、心臓の鼓動が出て、意識が回復したが、病院への移送が必要と判断し、119番通報した。しかし、救急隊もボートでしかアクセスできず、搬送も順番待ちで3時間かかるとの答えがあり、それまで社内でする救命対応を電話で聞いた。</p> <p>通信が不安定な中、家族からボートで救出されたとの連絡が入り、浸水エリア外の避難所に避難したことを確認。今後、朝昼夕の3回、SNSで状況を交換することとした。</p>	<p>ビル内での待機も長期化し、暑さもあり、体調不良者が続出。自分もかなり疲れてきたため、そろそろ帰宅できないか市役所に問い合わせたが、浸水したエリアは地盤沈下で、湖のように水が溜まっている状態にあるため、すぐには市内を移動できるようなにはならない。あと1～2週間はかかると言われた。もし負傷したり、病気になっている等の場合は、ボートで救助に行くとのこと、10名近くの体調不良者の救助を依頼。</p> <p>高齢の両親は一時避難した避難所から福祉避難所へ移動した。</p> <p>大変なことの1つは停電がなかなか解消しないこと。このため、昼間はともかく、夜間は備蓄品のランタンなどを大切に付けて最低限の明かりを確保した。このビルの備蓄は、通常よりも多く、1週間分はあったが、それ以降は、屋上にヘリコプターから届く救援物資でのいだ。トイレが使えなくなった時に備えて、使い捨てトイレも1週間分はあったが、汚物を薬剤で処理してビニー袋で封印しても、臭いが漏れ、空調ファンも停止しているため、大変だった。</p>	<p>地震発生から半月が経過し、停電が解消してから数日して、ようやくこのエリアの排水が進み、ビルを出ることができるようになった。</p> <p>水は引いているものの、街じゅうに瓦礫やごみが散乱し、地震前とは様変わりしている。</p> <p>自宅はすでに1階が浸水し、すぐには使えないと連絡を受けていたので、家族がいる避難所に向かった。</p> <p>会社のオフィス自体が浸水してしまったため、いつから業務を再開できるかわからない状況だが、会社からの情報では、BCP作成時に検討していた、浸水していないエリアで、仮の事務所をすぐに検討したので、他社よりも動きが早く、契約することができたとのこと。</p>	<p>1ヶ月を過ぎ、ビルの清掃や設備の復旧をしている間、郊外の小さなビルに間借りし、取引先とのやりとりや、データの確認を行った。幸い、データはデータセンターにバックアップを取っていたので、比較的スムーズに業務を再開することができた。</p> <p>あまりにもビルでの避難生活が長かったため、疲労と精神の落ち込みがあり、専門家からメンタルケア（カウンセリング）を受ける事になった。</p> <p>現在、自宅の罹災証明の申請をしながら、浸水部分の清掃と構造的に問題が出ていないか確認を進めている。</p> <p>あと2週間くらいすれば、みなし仮設住宅に住むことができそうだという話を聞いている。</p>
			もし対策をしなければ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし上層階への垂直避難をしなかったら 浸水や漂流物で生命の危険があった。</li> <li>●もしオフィスに飲料・食料の備蓄がなかったら 市内が長い時間浸水しているため、社員が脱水症状や空腹で体調を崩していた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もしAEDの使い方を知らなかったら 心肺が停止していたかもしれない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし備蓄が1週間ではなく3日分くらいしかなかったら 行政から食糧の支援が間に合わなかったかもしれない。</li> <li>●もし食糧以外の備蓄品（特に使い捨てトイレやランタンなどの照明）がなかったら トイレに汚物がそのまま溜り、見るに堪えない不衛生な状態になったり、日没後の行動ができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●BCPで代替オフィスの場所に目星を付けていなかったら 代替オフィスの確保が遅れ、事業再開にもっと時間がかかった。</li> </ul>

# 7-11. シナリオ内容 ⑪商店【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 (長期浸水地域)	⑪商店	中心商店街	<p>2分以上つづいた長い揺れの後、商品が棚から落ちるが建物は倒壊せずに済んだ。過去の訓練どおりに、商店街を歩いていた来街者に声掛けし、アーケードを抜けて、最寄りの津波避難ビル（オーテピア）へ誘導。地震発生後、津波が60分程度で中心部に押し寄せることを、商店街の勉強会で聞いていたので、対応を急いだ。店では、津波来襲に備えて、貴重品は、店舗の3階以上に保管してある。オーテピアでは、避難ルートの掲示に沿って上層階に向かった。名簿に名前を記載し、夜はビル内で待機し、毛布と水を分け合う。</p>	<p>2日目、周辺の排水が進まずビルで継続待機。非常用持ち出し袋の貴重品と持参した少量の飲食料で必要最低限をまかなう。館内の説明では、オーテピアは、津波避難ビルだが、長期の避難所には指定されていないため、最低限の備蓄はあるが、今後ポートなどで避難所に移動する必要があるという。商店街の役員が数名いたため、相談し、市と協力して、掲示板を作り、救援・避難所開設・物資配布等の情報を共有することにした。今回の津波は、高知県が想定した最大規模に近いと、排水に2週間以上かかる可能性がある、市から情報が入った。このため、体調の悪い数名の方を優先的に、病院等へ移送するように、市に要望した。</p>	<p>4日目になり、排水が進まないため、干潮で水が引いた時に協力しながら徒歩で、市内北部の（浸水していない）避難所に移ることになった。自分の店舗や商店街は、すでに1階部分が浸水しており、営業も居住も不能。このため、避難所へ移動し、今後の対応を検討することとした。罹災証明の準備と在庫の被害確認を進めたいが、水が引いていないため、不可能な状況で肩を落とす。夫婦で避難所に移動し、取引先に連絡した。応急仮設住宅申請と、仮設店舗の候補場所の情報収集を開始した。</p>	<p>約4週間後、応急仮設住宅へ入居。商店街振興組合で再建計画を協議。3年前に作成していた、津波浸水時の復興計画を始動。中心部の排水の完了に合わせて、商店街全体の清掃、瓦礫やごみの処分、アーケードの補修、各店舗の再建を進めることになった。商店街に対し、商工会議所が公的な支援の窓口になり、組合として支援を受けることになった。しかしながら、個店の修繕も含めて、商店街の再開までには2年～3年かかるため、復興計画時に想定していた場所で、希望者が仮設店舗での営業を始めることになった。</p>	<p>3ヶ月以降、仮設店舗で営業再開。仕入と在庫管理を見直し、現金管理の安全策を強化。アーケードと店舗の本再建に向け、商工会議所の支援を受けながら、設計と資金計画を詰める。イベントを小規模で再開し、地域の回遊性を高める工夫を続けることになった。</p>
			<p><b>もし津波避難ビルを知らなかったら</b> 津波に飲み込まれていた可能性がある。</p> <p><b>●来街者の避難誘導の訓練をしていなかったら</b> 避難できる猶予時間や、避難にかかる時間もわからず、逃げ遅れによる負傷・死亡の危険が増した。</p> <p><b>●業務関係と個人の貴重品を1階に置いていたら</b> 津波発生時に上部階に運ぶことになり、逃げ遅れた可能性がある。</p>	<p><b>●もし「津波避難ビル」と「指定避難所」の役割の違いがよくわかっていなかったら</b> 津波避難ビルにしばらく住むことができると誤解していたかもしれない。</p>	<p><b>●商店街が浸水したらその後のようなステップで自分の居住地が変わるかかわかっていなかったら</b> 時間軸に沿って自分の状況のイメージが持てず、想定外のことがばかりになり、生活や仕事の再建にさらに時間がかかった。</p>	<p><b>●もし商店街で再建計画を協議していなかったら</b> やるべきことの整理に時間がかかり、さらに再開が遅れた。</p>	<p><b>●もしもの時に仮設店舗で復旧することを想定し、シミュレーションしていなかったら</b> 仮設店舗営業に踏み切るのにとっても時間がかかり、チャンスを逃していたかもしれない。</p>

# 7-12. シナリオ内容 ⑫大学生【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 （長期浸水地域）	⑫大学生	キャンパス（高知城付近）	<p>発災直後、長時間の揺れが続き、机の下で頭部を保護。天井材や書棚の落下に注意し、揺れが収まった後も余震を想定して動作は低姿勢。教員の指示で窓際・廊下中央を避けつつ、エレベーター停止に伴い階段で研究棟の『3階以上』へ垂直避難。海岸方向からのサイレンと大津波警報を確認し、低地・1～2階へは降りない。キャンパスの中庭ベンチにいる学生にも職員が拡声器で避難を大声で垂直避難を呼びかけ。1、2時間してキャンパス内は津波の浸水で池のようになった。長期浸水域であるため「翌日以降も地上に降りられない可能性」を前提に、校舎の上層階に保管していた備蓄（水・食品・簡易トイレ・毛布）を人数に応じて配布。トイレは便座に被せる袋式を採用し、使用後はゴミとして処理する。通路・階段にはランタンを配置し、転倒防止のため立入禁止区画を設定する。SNSの未確認情報に惑わされないように、県と市の防災情報、防災アプリ、ラジオ等の公的一次情報に限定して学生に共有。家族への連絡は短文のみとして省電力運用する。構内の残留者は職員も含めて名簿化し、要配慮学生や留学生には特に配慮する。定期的に教職員が巡回して見守る。</p>	<p>長期浸水によりキャンパス外への移動が不可能となり、避難生活がそのまま上層階で継続する。断水・停電の継続を前提に、当番制（清掃・給水・充電・見守り）を編成し、掲示板でスケジュールを可視化する。携帯トイレは二重封かんとし、手洗い→消毒→配膳の一方通行で衛生導線を整備。夜間の寒さ対策として毛布・アルミシートを活用。体調不良者は保健管理センター（非常配置）で早期対応し、症状・時刻を記録。流言・デマを防ぐため、公式情報以外は掲示で注意喚起を行う。長期化を見越し、精神的ストレスへのケアとして、学生同士のミーティングや軽い体操などを取り入れる。</p>	<p>4日目も浸水が続き道路も冠水したままのため、干潮で水が引いた時に要配慮学生を補助しながら徒歩で避難所へ移動。自宅（アパート）への帰宅は完全に不可。アパートの部屋は1階のため、浸水で家財全般が使えなくなっている可能性が高く、とても心配になる。排水されるまで数週間、完全に復旧するまでに数ヶ月以上かかると想定され、今後の排水と移動の時期の目安を学生に連絡する。大学は安全確保のため当面「キャンパス閉鎖（約3週間）」を発表し、浸水していないキャンパスや高台の提携施設から最小限のオンラインでの連絡を開始。授業再開の見込み、罹災証明の取得方法、奨学金・学費猶予、PC貸与、心のケア等の案内を学生に周知する。</p>	<p>排水作業が進み、一部地域で移動手段が復旧し始める。学生は避難所や友人宅へ段階的に移動するが、自分のアパートは浸水・設備故障・カビの繁殖により居住不能。市の案内に従い「みなし仮設住宅」を申請し、入居までの生活を避難所で継続することになった。避難所での生活に移行する前に、香川県の自宅に一時帰省。大学は代替キャンパスでの一部講義・実習を再開し、図書館資料をデジタルで開放。PC破損学生向けに端末貸与制度を拡充。罹災証明や災害支援金の申請に必要な写真・書類はクラウドと紙で二重保管する。</p>	<p>大学の清掃が進んだが、浸水による電気系統の不具合で、キャンパスでの本格的な授業再開はまだの状況。大学が紹介してくれた借り上げの仮設住宅（アパート）に転居し、新しい生活を開始する。家具は最低限をリユース品で揃え、非常持出品を玄関付近に再配置。大学はハイブリッド授業（対面＋オンライン）へ移行し、単位取得の遅れが出ないように配慮。サークルや研究室は被災学生支援として中古端末・教科書の共有制度を整える。地域の泥かき・仕分けなどのボランティアのつながりを回復。大学が今回の教訓（長期垂直避難の実際、情報整理、衛生導線、写真記録、メンタルケア）を学生から募集する。</p>
			もし対策をしなければ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 垂直避難をせず1～2階に留まった浸水と漂流物で生命の危険。</li> <li>● 備蓄品を建物の1階に保存していたら浸水で使えなくなった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 当番表や掲示が無し物資配布が混乱し、行列・口論等が発生。衛生導線を作らない。</li> <li>● 公式情報を学生に案内しないデマで学生が混乱する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学が今後の見通しを伝えない学生の心身の不調が増大する。</li> <li>● 今後の救援・救済策を検討しない不安から自宅に戻る学生が増加。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 代替住宅の案内が無い学生の生活の再建が遅れる（授業どころではなくなる）。</li> </ul>

# 7-13. シナリオ内容 ⑬高齢者（一人暮らし）【高知市周辺（長期浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
高知市周辺 （長期浸水地域）	⑬高齢者 （一人暮らし）	自宅	<p>強い揺れが3分ほど続いたのだろうか。建物は2年前に、耐震補強をしていたので、室内のテーブルの下で揺れの収まるのを待った。</p> <p>高知県の被害想定を確認していたので、自宅の1階部分は浸水してしまうことは知っていた。このため、大津波警報のアラート音を聞き、二階へ避難。毛布を肩に掛け、冷たい空気に震えながら窓から外を確認。水が1階の半分の高さくらいまできており、徐々に室内に入り込んできた。近隣の呼び声に応え、連絡を取り合い、早く救助に来てほしいことを伝えた。非常用持ち出し袋を手元に置き、夜は毛布とカイロで体を温める。</p>	<p>救助がいつ来るのかもわからなくて不安を感じた。このため、個別避難計画を作成した際に、支援者になってくれた町内会の人に連絡を取ったところ、今救助を要請しているので、もう少し待ってほしいと言われた。</p> <p>救助に備え、荷物は最低限にまとめ、薬と連絡先メモを胸ポケットに入れる。</p> <p>3日目の朝にようやく市の消防のボートが近づいてきたので、窓から声を出して助けを求め、2階のベランダから、助けを借りながらゆっくりボートに移った。</p> <p>一時滞在場所に着くと体調確認を受け、温かい飲み物を受け取る。</p>	<p>4日目、避難所に移動した際に、最近の体調を巡回している保健師に伝え、薬の手配を依頼する。自宅は一階が使えず、町内会の支援者をお願いして、罹災証明のための写真と書類を準備した。</p> <p>また、県外に住む息子と連絡がやっと取れ、交通機関が復旧次第、避難所に来てもらうことになった。</p>	<p>3週間目に入り、息子の助けを得て、応急仮設住宅へ入居するための申請を行った。</p> <p>応急仮設住宅に行けることは有難いが、自宅が浸水して、まだ片付けも済んでいないこと、応急仮設住宅が、自宅から徒歩では行けない遠い場所になることで、もしかしたら知らない人ばかりではないかと心配になった。</p>	<p>地震から1ヶ月が過ぎて、応急仮設住宅に引っ越す。同じ町内会の人何人かいたのでほっとする。久しぶりに共同生活が終わり、プライバシーのある生活になって、精神的に少し楽になった。近隣と挨拶を交わし、見守りの連絡網に参加。家の補修計画は季節と工事の空き状況を見て調整することになった。</p>
			<p><b>もし対策をしなれば</b></p>	<p>●もし津波による浸水の高さを知らず自宅2階への垂直避難をしなかったら 浸水で生命の危険があった。</p> <p>●もし毛布等を用意しなかったら 低体温で体調を崩したかもしれない。</p>	<p>●もし個別避難計画を作成していなかったら 支援者とのつながりがなく不安が増した。</p>	<p>●もし保健師に相談しなかったら 必要な薬を手に入れることができず、体調を崩していたかもしれない。</p> <p>●もし罹災証明の申請準備をしなかったら 仮設入居の優先度がさがり住まい確保が遅れたかもしれない。</p>	<p>●もし応急仮設住宅の入居手続きをしなかったら 長い期間避難所にいるか、県外の息子のところに行く可能性があった。</p> <p>●もし応急仮設住宅のコミュニティに参加しなかったら 慣れない土地で人との交流がなくなり、孤立していったかもしれない。</p>

# 7-14. シナリオ内容 ⑭国内観光客【観光客（津波浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
観光客 (津波浸水地域)	⑭国内観光客	はりまや橋	<p>観光中、路面が揺れて橋の周辺で転びそうになる。地元の店員に声を掛けられ、最寄りの津波避難ビルへ誘導される。階段を上りながら同行の友人と安否を確認し、上階で待機。水と毛布が配られ、スマホの電源を節約するために、写真や動画の投稿は控え、電池温存を優先。使用は最低限にする。夜は不安だが、見知らぬ人同士で励み合った。</p> <p>夜になって奇跡的にSNSで家族と連絡が取れて、避難している場所と、浸水が長引く可能性があるため、すぐには東京に帰れないことを伝えた。</p>	<p>2日目、市内の排水が進まずビルで継続待機。荷物の紛失防止にタグをつけ、貴重品は体に密着。緊張が続くため、深呼吸と軽いストレッチで体調を整える。</p> <p>待機場所のゾーン分けで混雑を回避し、列での立ちっぱなしを避けた</p>	<p>4日目、排水が進まない。周りの人の話では、地盤が低いので水が自然に流れていかないらしい。徒歩で外に出るには2週間以上かかる可能性もあるとのこと。</p> <p>しかし、遠方からの来訪者（地元出身のいないビジネスマンや観光客等）、また体調を崩して入院が必要な人に対して、今後の受入情報が掲示され、避難所の候補が示される。</p> <p>干潮で水が引いた時に、地元の方に誘導されて徒歩で避難所へ移動する。市内は、まだ水没状態で、衛生状態が懸念される。</p> <p>帰宅の交通は未復旧のため、代替ルートを集めて待機。</p>	<p>市内の安全情報を確認し、記憶の整理のため写真とメモをまとめる</p> <p>3週間目に入った頃、陸路・鉄道・空路が段階的に復旧。乗車・搭乗の整理が始まり、順番に案内される。高知空港の復旧に時間がかかるため、バスで高松に向かい、そこから空路で東京に向かった。</p> <p>高知市からの案内もあり、今後に備えて、宿泊費や必要経費の記録を残し、保険の手続きに備える。</p> <p>宿泊費は領収書を一枚にまとめ、帰宅後の申請に備えた。</p>	<p>帰宅後、急激なストレス経験に伴う心身の変化に注意し、健康診断を受けるために病院を受診した。</p> <p>高知市や一時滞在したホテルへ支援への感謝を手紙で伝える。</p>
			<p><b>もし対策をしなれば</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●もし地元の誘導に従わず避難ビルへ移動しなかったら津波に巻き込まれる危険があった。</li> <li>●スマホの電源使用を節約しなかったらすぐに充電を消費し、家族との連絡が取れなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし荷物管理をしなかったら貴重品紛失で帰宅や身分確認が遅れた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし遠方からの来訪者が優先的にホテルや避難所に誘導されなかったら慣れない、見知らずの人ばかりのところで心身ともに不調を来していた可能性はある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし交通情報や避難生活時の記録を残すことなど、災害時帰宅困難者向けの案内がなされなかったら帰宅が遅れ、保険手続きなどの情報が手元に残らなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし心身の健康のために病院で健康診断を受けなかったらしばらくしてから体調の不良が顕在化した可能性はある。</li> </ul>

# 7-15. シナリオ内容 ⑮クルーズ船乗客 【観光客（津波浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
観光客 (津波浸水地域)	⑮クルーズ船乗客 (外国人)	高知新港客船ターミナル	<p>埠頭で揺れが始まり津波警報が発令された。津波の到達までに猶予時間は少なく、船内の乗員・乗客は「<b>TSUNAMI!!</b>」「<b>GO UP!!</b>」「<b>RUN!!</b>」というスタッフの大声やジェスチャーに従って、全員が港内の高台へ緊急退避。足元は滑りやすく、同行者と手を取り合う。高台から海面の不気味な変化を見て、静かに待機。スタッフの「<b>We are safe. Don't panic.</b>」という説明に安心する。船は沖合へ避難する時間がなく、埠頭に停泊した状態。乗員・乗客は津波高台上の建物に一時的に避難して、水と毛布を受け取り、夜は座って休む。高台での待機中は毛布をまとして、体温低下を防いだ。また一部市内に行った外国人乗客の安否が心配になった。</p>	<p>2日目、高台で待機継続。安否確認と言語サポートが用意され、必要な人に手伝いが入る。船の状況が定期的にアナウンスされ、帰還の可否が検討される。体調管理のため軽い体操を行い、日差しを避けて休憩。安否確認は名簿番号で行い、個人情報をも最小限に。日差し避けのためシートで簡易日陰を作った。市内に観光に出かけた外国人グループは、事前に共有された災害時の緊急番号に電話が入り、高知城近くの津波避難ビルで保護され、全員の無事が確認された。市内では、<b>近くの人声やジェスチャーと「TSUNAMI ESCAPE BUILDING」のサインに助けられた。</b></p>	<p>4日目、船が港に戻り、乗客は順次船内へ移動。客室で休息が取り、食事や医療の提供が再開。災害時の対応マニュアルに基づいて、この先の寄港地の安全確認が行われ、次の航路計画が練られる。必要な手続きと案内が各言語で配布される。船内では食事アレルギーの申告を再確認し、医療室の連絡先を全客室に配布。次の寄港地の安全が確認され、乗客は再乗船。港の修復状況に応じて出航。市内に観光に出かけた外国人グループは、津波避難ビルからボートで優先的に救出され、フェリーターミナルに戻ることができた。</p>	<p>船内では、健康診断やカウンセリングが行われ、乗客は今後の観光計画の見直しを行った。</p>	<p>クルーズ船の運航会社では、今回の被災を教訓に、大地震や津波、台風時の危機管理計画を見直し、乗客が慣れない土地で危険に巻き込まれないよう、防災ハンドブックを多言語で作成した。</p>
			<p><b>もし対策をしなれば</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●もし港内の高台へ避難できず、運航会社に共有されておらず、移動しないまま岸壁周辺に留まったら津波で死亡する危険があった。</li> <li>●もし英語やジェスチャーの案内がなかったら状況がわからず、逃げ遅れたり、情報不足で不安になった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし街中で英語のサポートがなかったら逃げ遅れの発生や、クルーズ船の状況や災害の情報が十分に伝わらず混乱した。</li> <li>●クルーズ船の乗客が市街地の津波避難ビルにいたことが市で共有されなかったら優先的に救助され、ターミナルに戻るのに遅れた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし災害時の対応マニュアルがなかったら確認漏れ、説明漏れなどが発生し、乗客が混乱した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●もし船内で、健康診断やカウンセリングが行われなかったら乗客の心身の不調が、突然顕在化した可能性がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●クルーズ船の運航会社が大地震や津波の危機管理計画をそもそも持っていなかったら津波後のスムーズな対応ができなかったかもしれない。</li> </ul>

# 7-16. シナリオ内容 ⑩お遍路さん【観光客（津波浸水地域）】

			～1日	～3日	～2週間	～1ヶ月	1ヶ月以降
区分	人物像	被災場所	直後の緊急対応		初期の復旧段階		本格的な復旧段階
			命を守る 発災時の居場所	命をつなぐ 居住地・近隣	生活を立ち上げる 居住地・近隣・仕事場		
観光客 （津波浸水地域）	⑩お遍路さん	沿道部国道	<p>路上で強い揺れ。防災無線の音声（日本語と簡単な英語）や地元の人声掛けに従い、国道から外れて津波避難タワーへ。背負ったリュックを軽くし、水と食料を上に入れ直す。階段を上る途中、年配者に肩を貸して休憩を挟む。上階で座り、靴を緩めて足の血行を整える。海の異様な静けさの後、黒い波が押し寄せるのを遠くに見る。夜は読経で心を落ち着け、体温を逃さないよう上着を重ねる。数珠と納経帳を防水袋へ移し、歩行用の杖をタワー内でゴムキャップに交換。</p>	<p>2日目、タワーで待機。受け入れ先の案内が掲示され、宿の候補や避難所の情報が更新される。荷物の重量を見直し、必要最小限に再パッキング。水分補給と足のストレッチを続け、靴擦れの手当て。同行者がいないため、地元町内会のリーダーと連絡先を交換し、今後の行き先を伝える。荷物は雨具・水・食料・薬を上部に再配置。大阪に住む家族宛てにSNSで連絡を入れるが、なかなか既読にならない。</p>	<p>4日目、浸水の解消に伴い受け入れ先の旅館に移動。ただし停電は継続しており、洗濯と足のケアを行い、地図で安全な歩行ルートを確認。食事の配布時間や等営業情報をメモ。風呂に入れないため、水で体を拭く。県内が大規模に被災し、緊急事態になっているため、八十八か所巡りはいったん中断。1週間後に、町の手配した臨時バスで高知市内に到着し、再開したばかりの高松行きのバスに乗り、高松から別のバスで大阪を目指す。高知駅を出て、20時間後に大阪の自宅に戻った。</p>	<p>道中で経験した被災時の経験、毎日の変化をメモし、写真とともに記録した。道中で得た支援に感謝のメールや手紙を送った。また、医療機関で健康診断を受けた。</p>	<p>1ヶ月以降、四国内の被災地情報を把握しながら、巡礼中に行方不明になった人のことを知り、現地で知り合った方に、行方不明者のことを知らないか確認することにした。</p>
			<p><b>もし対策をしなかったら</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●もし地元住民の声掛けに従わず国道に留まったら 津波で命が危険にさらされた。</li> <li>●もし防災無線（多言語）がなかったり、地元の人が外部の人に声掛けをしなかったら 津波の危険に気づかず、命の危険にさらされた。</li> </ul>	<p><b>もし地元町内会のリーダーに自分の情報を伝えていなかったら</b> 行方不明者情報などが行政機関や警察に共有されなかった。</p>	<p><b>もし安全な歩行ルート確認と旅館の情報を確認しなかったら、</b> 危険箇所ですら事故や体調不良に陥った。</p>	<p><b>もしお世話になった人に連絡をしなかったら</b> 現地では安否不明者として引き続き扱われていたかもしれない。</p>	<p><b>安否不明者について巡礼で知り合った方々に照会しなかったら</b> 安否の確認がさらに遅くなるかもしれない。</p>